【研究論文】

保育内容を実践に生かす取り組みとしての幼児教育祭

―「幼児教育祭」を保育現場につなげるために―

岸本美紀・長柄孝彦・妹尾美智子・本山益子
鳥居恵治・大岩みちの・佐善　圭

要　旨　「保育内容総合」の授業担当者である我々は、この授業における活動を保育実践力につなげるために、受講する全ての学生に毎回記録を課している。本研究では、授業における活動について学生達がどのようなことに気づいているのかを「保育内容」の領域や具体的な項目に関連させながら、記録を分析し、発表形式別に検討した。その結果、発表形式による特徴を確認することができた。また、学生達の体験や意識は、充実感や存在感などの実感を伴う深い体験であることが分かった。

Abstract

The author has all students of the "Overall Child-Care" class record the course contents each time to nurture their practical ability of child-care through the class activities. The author analyzed their records for each presentation mode to see what the students learned from the class activities. As a result, the author has identified the characteristics of each presentation mode and found that their experiences and consciousness were deep with actual feelings, such as contentment and presence.

Ⅰ．はじめに

本校幼児教育学科で実施されている「幼児教育祭」は、平成6年度から始まり平成20年度で15回目の実施となる。「幼児教育祭」は、「保育内容総合」の授業における活動や取り組みの積み重ねを発表する機会として位置づけられている。そして、この「幼児教育祭」「保育内容総合」での経験や獲得した力、培われた力が「子育て支援能力」としても発揮できるという見地から、学習プロセスを明確にし、取組をまとめたところ、文部科学省より、15年間におよぶ本取組が平成19年度の「特色ある大学教育支援プログラム」として選定されるに至った[1)]。

また、「幼児教育祭」「保育内容総合」の成果については、近年では全国保育士養成協議会第38回、第46回、第47回研究大会、本校研究紀要第41号で発表してきた。全国保育士養成協議会第38回研究大会では、「保育内容総合」における活動を通しての学生の気づきについて報告したが、舞台発表を作り上げていく過程において学生は、表現力の向上だけではなく、自分たちで実施していく経験の中で生じてくる仲間との協力・軋轢などを通して、自律的な協働関係を経験し、企画力・運営力・人間関係力なども身につけていくことに気づいていることが明らかになった。そして、その背景には、「自力でやり遂げた」という実感（達成感）と「価値ある成果」を残すことができたという自信が存在していることが示唆された[2)]。また、同第46回の研究大会においては、「幼児教育祭」の中の舞台発表を対象とし、その活動を通しての学生の気づきに関して報告したが、記録を書くことにより活動を振り返ることができ、また活動が保育実践につながっていることに学生が気づいたことを確認した[3)]。

Ⅱ．研究目的

前述の研究発表[1) 2) 3)]においては、2年生の「舞台発表」に限っての成果を発表してきた。それは、この授業での活動が保育実践につながっていることの気づきを学生に促すために、「舞台発表」グループで先行的に実施したことによる。しかし、我々は、「幼児教育祭」での発表をまとめとする「保育内容総合」の授業において、「舞台発表（ファンタジーワールド）」「フロアー劇（シアターランド）」「運動遊び（子どもランド）」という発表形式の違いは

あるものの、学生自身が楽しむだけではなく、常に子どもを意識し、さらに保育実践へ還元していくことを、授業担当者として学生に促してきた。その過程において、学生がより明確に意識する必要性を感じ、「保育実践力」の獲得につなげることをめざして、昨年度より毎授業後に授業を振り返っての記録を課すことを試みてきた。

今回は、この記録を「保育内容総合」を受講する全ての学生に課し、学生達がどのようなことに気づいているのかを発表形式別に検討した。そして、「保育内容」の領域や具体的な項目に関連させながら分析することで、この授業における活動を保育実践力につなげていくことを目的とする。

Ⅲ．方法

1．対象

本学幼児教育学科第一部２年生

＜内訳＞

舞台発表選択	３クラス	126 名
フロアー劇選択	１クラス	45 名
運動遊び選択	２クラス	86 名

2．調査の期日

⑴記録

2007 年 11 月５日から 2008 年２月４日までの毎授業後（合計 10 回）

⑵「保育内容」について

2008 年２月９日の「幼児教育祭」終了後

3．調査の概要

⑴記録

①活動に保育内容５領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）が含まれる実感の程度を調査（4段階尺度法）

②幼稚園教育要領の中に示された「内容の取り扱い」についての留意点（表１）を意識・経験した程度を調査（5段階尺度法）

表１：記録で調査した「内容の取り扱い」についての留意点の内容

①関わった人たちとの温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わう
②興味や関心、能力に応じて全身を使って様々な活動に取り組む
③体を動かすことの楽しさを味わい自分の体を大切にする
④自らが周囲に働きかけることにより多様な感情を体験する
⑤試行錯誤しながら自分の力で行うことの充実感を味わう
⑥人とかかわることの楽しさや大切さを味わう
⑦伝え合い共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする
⑧ものを大切にする気持ち、公共心を養う
⑨数量などに関する興味、関心、感覚などを無理なく養う
⑩自分の感情や考えを伝え合う喜びを十分に味わう
⑪絵本や物語などに数多く出会い豊かなイメージをもつ
⑫文字に対する興味や関心、感覚を無理なく養う
⑬美しいもの、優れたものなど様々なことに出会い、そこから得た感動を他者と共有し様々に表現する
⑭自ら様々な表現を楽しみ表現する意欲を十分に発揮する
⑮特定の技能を身につけようとする。

なお、⑮「特定の技能を身につけようとする」については、子どもたちには求めないようにしたいことであるが、保育を実践する上では養成の過程で身に着けておくことが望ましいと思われたため、加えた項目である。

⑵「保育内容」について（自由記述）

①「保育内容」の理解について

保育内容５領域が、どの程度活動にふくまれていたか、またその具体的活動について

②「保育内容」の理解の変化（授業を通して・子どもとのかかわりから）

4．手続き

⑴毎授業後に、学生に対し、活動に保育内容５領域（健康、人間関係、環境、言葉、表現）が含まれる実感の程度と、幼稚園教育要項の中に示された「内容の取り扱い」についての留意点を意識・経験した程度を問う記録を課した。

⑵幼児教育祭終了後に、「保育内容」について問う記録を課した。

⑶記録の分析

今回は、以下の①～③について結果を発表形式別

に検討した。

①授業毎の領域別平均とその特徴

②留意点毎の平均とその特徴

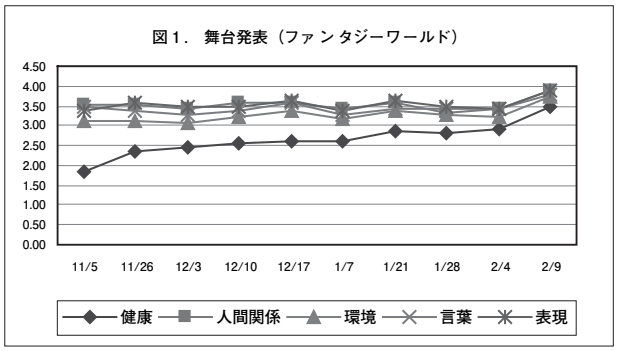
③「保育内容」の捉え方とその変化の要因

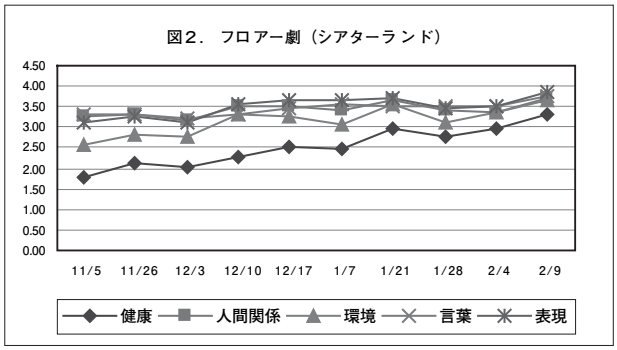
Ⅳ．結果と考察

ほぼ毎回の授業後に記録された５領域を観点とした振り返りの結果を、量と質の両面から検討する。

１．活動に５領域が含まれている実感の推移

「今日の授業の中に、次の領域に関わる活動はどの程度含まれていましたか？」という質問に対して、「4. 非常に 3. まあ 2. あまり 1. まったく」の４段階による回答を求め、その結果の平均点推移を図１（舞台発表）・図２（フロアー劇）・図３（運動遊び）に示した。





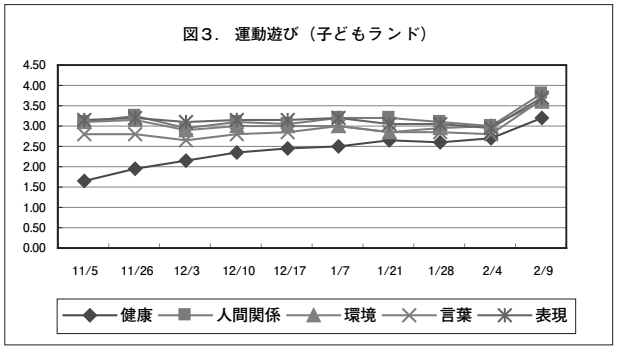


図１から３より、どの発表形式についてもほとんど同じ推移を示していることがわかる。どの発表形式においても「健康」領域が含まれるという実感は最も弱い。また、どの領域も２月９日の幼児教育祭当日が最高値になっており、これは昨年の結果と同じである。つまり、実際に子どもを中心とした観客の存在がこの数値の上昇をもたらしていると考える。

２．留意点を意識・体験した程度

幼稚園教育要領に示された５領域の「内容の取り扱い」についての留意点から、授業活動の中で意識・体験が可能な 15 項目を設定した（表 1）。そして、「今日の授業において、どの程度意識・体験しましたか？」という質問に対して５段階での回答を求めた。

⑴ 発表形式別の平均点

11 月５日から２月９日までの合計 10 回について、15 項目の平均点は表２の通りである。

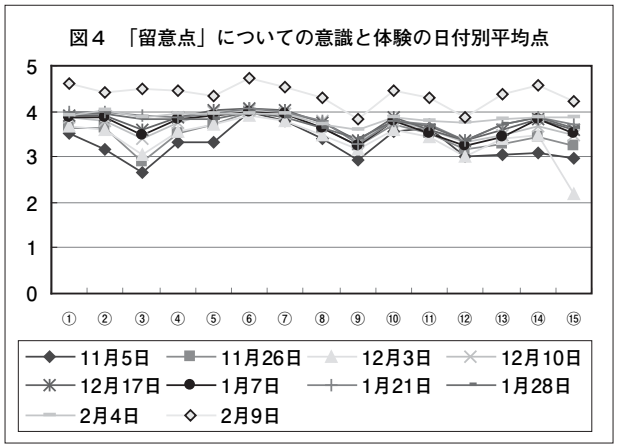
表２から、発表形式別によって大きな差がみられないことが分かる。統計的にも有意な差はなかった。

一番平均点が高いのは、「フロアー劇（シアターランド）」であったが、15 項目中 12 項目で一番高い平均点であった。「フロアー劇（シアターランド）」は、１クラスのみの実施で、１日２回公演があり、子どもと直接やりとりができるなどの特徴があるが、そのようなことが実感できる度合いが高いという結果に反映していると推測される。

表２：「留意点」について意識・体験した程度の発表形式別の平均点

質問項目	舞台発表	フロアー劇	運動遊び	全体
①自己の存在感や充実感	3.83	3.99	3.84	3.89
②全身を使って活動に取り組む	3.84	3.92	3.74	3.83
③体を動かすことの楽しさ	3.62	3.65	3.27	3.51
④多様な感情を体験	3.82	3.89	3.66	3.79
⑤自分の力で行うことの充実感	3.92	3.86	3.81	3.86
⑥人とかかわることの楽しさ	4.03	4.21	3.96	4.07
⑦自分からかかわろうとする	3.98	4.10	3.86	3.98
⑧ものを大切にする気持ち	3.71	3.68	3.74	3.71
⑨数量などに関する興味	3.27	3.23	3.52	3.34
⑩自分の感情や考えを伝え合う	3.80	3.92	3.73	3.81
⑪豊かなイメージを持つ	3.70	3.72	3.61	3.68
⑫文字に対する興味	3.35	3.41	3.28	3.34
⑬感動を他者と共有し	3.57	3.74	3.45	3.59
⑭表現する意欲を十分に発揮	3.73	3.87	3.63	3.75
⑮特定の技能を身につけよう	3.32	3.59	3.41	3.44
平均	3.69	3.78	3.63	3.70

⑵ 時期による平均点



２月９日の「幼児教育祭」当日の結果が、どの項目についても一番平均点が高いことが分かる。

また、15 項目全ての平均点について、初回である 11 月５日が 3.29 点と一番低く、２月９日の「幼児教育祭」当日が 4.36 点で一番高いことが分かった。

平均点の推移を見ていくと、「幼児教育祭」当日は、９回目の２月４日（平均 3.85 点）から 0.8 点上昇し、一番大きな上昇値となっている。その他では、初回 11 月５日から２回目の 11 月 26 日（平均 3.50 点）に約 0.2 点上昇し、3 回目の 12 月３日（平均 3.40 点）から４回目の 12 月 10 日（平均 3.68 点）で約 0.3 点上昇している。その他は上昇下降を繰り返し、２月９日の「幼児教育祭」当日に最高点となる。

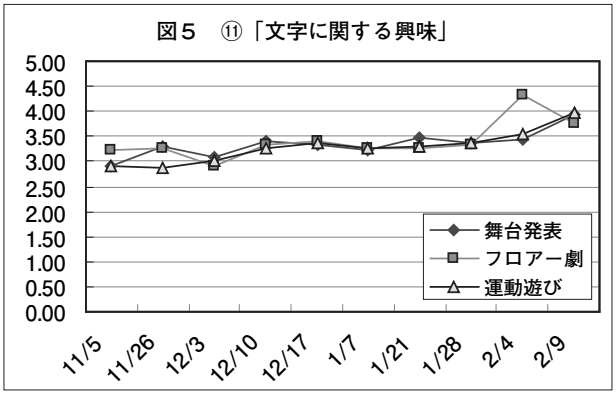
本番で実際に子どもたちや観客を前に振舞うことが、留意点を意識して体験できたという結果につながっていると推測される。また、本番で得られる満足感も、高い得点を選ぶことにつながっていると考えられる。

⑶項目ごとの検討

15 項目それぞれについて、特徴をみた。

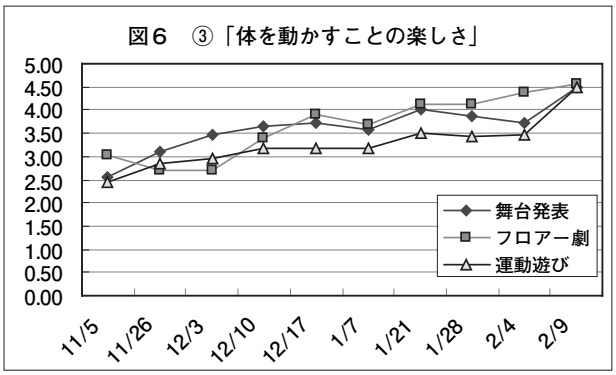
前述の通り、「フロアー劇（シアターランド）」が一番高い平均点を示す項目が多いが、その推移を見ていくと、さらに特徴がみられた。それは、「舞台発表（ファンタジーワールド）」と「運動遊び（子どもランド）」では、最終回である「幼児教育祭」当日が一番高い数値を 15 項目全てで示すのに対し、「フロアー劇（シアターランド）」では、「②興味や関心、能力に応じて全身を使って活動に取り組む」、「⑨数量などに関する興味、関心、感覚を無理なく養う」「⑪絵本や物語などに数多く出会い豊かなイメージを持つ」、「⑫文字に対する興味や関心、感覚を無理なく養う」（図５）、「⑮特定の技能を身につけようとする」の５項目が、「幼児教育祭」直前の２月４日（９回目）が一番高い数値を示していることである。

２月４日（９回目）から「幼児教育祭」当日の下降が大きい「⑪絵本や物語などに数多く出会い豊かなイメージを持つ」の結果を下の図５に示す。



このように、９回目に一番高い平均点を示す項目があるのは、「フロアー劇（シアターランド）」のみである。このことは、「フロアー劇（シアターランド）」いう形式で観客との距離の近さがあるため、幼児教育祭１週間前に舞台となる空間が環境としてほぼ本番当日に近いものとなったことが、学生にその実感や当日への期待をもたらしたことが影響しているのではないかと推測される。

また、「③体を動かすことの楽しさを味わい自分の体を大切にしようとする」では、発表形式でそれぞれの特徴がみられる推移を示した。



⑷「幼児教育祭」当日の検討

前述の通り、「幼児教育祭」当日が 15 項目全てで一番高い平均点を示している。そこで、「幼児教育祭」当日の結果の分析を試みた。表３に、発表形式別に、「留意点」について意識・体験した程度の結果を示す。

表３：「幼児教育祭」当日における、「留意点」について意識・体験した程度の結果

質問項目	舞台発表	フロアー劇	運動遊び
①自己の存在感や充実感	4.52	4.67	4.63
②全身を使って活動に取り組む	4.42	4.38	4.48
③体を動かすことの楽しさ	4.49	4.55	4.49
④多様な感情を体験	4.45	4.38	4.52
⑤自分の力で行うことの充実感	4.54	4.38	4.06
⑥人とかかわることの楽しさ	4.70	4.74	4.74
⑦自分からかかわろうとする	4.53	4.52	4.57
⑧ものを大切にする気持ち	4.42	4.10	4.42
⑨数量などに関する興味	3.80	3.62	4.07
⑩自分の感情や考えを伝え合う	4.52	4.38	4.51
⑪豊かなイメージを持つ	4.32	4.05	4.48
⑫文字に対する興味	3.92	3.76	3.98
⑬感動を他者と共有し	4.48	4.38	4.32
⑭表現する意欲を十分に発揮	4.57	4.64	4.49
⑮特定の技能を身につけよう	4.37	4.14	4.11

それぞれの項目の最高点と最低点を発表形式で見ていくと、最高点と最低点の差が小さいものが多いが、⑤「自分の力で行うことの充実感」では、最高点の「舞台発表（ファンタジーワールド）」と最低点の「運動遊び（子どもランド）」では0.48点の差がある。次に差が大きいのは⑨「数量などに関する興味」で、その差は0.45点である。最高点は「運動遊び（子どもランド）」、最低点は「フロアー劇（シアターランド）」である。そして、⑪「豊かなイメージを持つ」（差：0.43点）、⑧「ものを大切にする気持ち」（差：0.32点）と続く。

次に、この表より、それぞれの発表形式における平均点の上位と下位の３項目を抽出し、その共通点と相違点を見る。

まず、平均点の下位３項目中２項目は同じであり（項目⑨と⑫）、学生達がこの取組の中で「数量や文字に対する興味、関心、感覚を無理なく養う」ことへの意識は低かったことが分かる。さらに、平均点が最高値を示した項目も、発表形式の違いにもかかわらず、「人とかかわることの楽しさ」であった（項目⑥4.7点以上）。つまり、どの発表形式においても、学生が仲間や子どもと大いに関わり、その楽しさや大切さを実感していることが分かる。

次に、２番目と３番目に得点が高い項目は、「舞台発表（ファンタジーワールド）」では項目⑭と⑤であり、これは舞台発表のなかで「表現する意欲を十分に発揮」し、「自分の力で行うことの充実感」を味わった証であると考えられる。また、「フロアー劇（シアターランド）」においても、項目⑭は第３位であるが、第２位は項目①である。フロアーという観客との距離の近さも影響してか、温かな触れ合いの中で「自己の存在感や充実感」を味わい、「表現する意欲を十分に発揮」したことを示している。

一方、「運動遊び（子どもランド）」では、項目①と項目⑦が２番目と３番目に得点が高い項目である。つまり、運動遊びのための体育館という拡散した空間で、伝え合い、共感し合うことを通して「自分から子どもにかかわろう」と試みたことや、その温かい触れ合いの中で「自己の存在感や充実感」を味わったことがわかる。そして、平均点が２番目に低い項目は⑤の「自分の力で行うことの充実感」であった。この結果からも「運動遊び（子どもランド）」は、自分が行うことよりも、子ども達とのかかわりを求め、援助することにより、充実感を得ていることが特徴であると確認できた。

Ⅴ．まとめと今後の展望

我々は、学生達がこの授業における取組の中で、保育内容を取り扱う際の留意点を意識・体験し、その体験をベースに子ども達の援助に生かすことを願って、このような記録を課した。その結果、発表形式による特徴を確認することができた。加えて、学生達の体験や意識は表面的な体験にとどまらず、充実感や存在感などの実感を伴う深い体験であることが分かった。これらは、保育を実践する際に大切にして欲しい、保育の本質とも大いに関連する体験である。留意点を頭の中で理解するに留まらず、体感することによって自分自身の「腑に落ちる」という状態に近づいたものと考える。

このことを念頭に置き、それぞれの発表形式の特徴を踏まえつつ、学生の保育内容についての理解を実践につなげられるような指導を心がけていきたいと考えるが、第一筆者は今年度から「保育内容総合」の授業担当者となり、上述の継続的に研究を行ってきた共同研究者の結果と視点に加え、新たな視点で研究を行っていきたいと考えている。筆者は現在、実習、保育内容等の授業を担当しているが、その中で、学生がどの程度保育内容５領域を理解し、それをどのように実践へつなげているのかを把握したいと考えるようになった。また、実習の懇談会などで、「本校の学生はよく言えば素直で真面目であるが、一方で無難、自らこうしてみたいという積極性に欠ける」という発言を、実習先の先生方から聞くことが多い。加えて、子どもへのかかわりや保護者

への対応、保育者同士の関係において、保育者として感じ取ることができる力、そして人とかかわる力の重要性も指摘されている。このような点において、先行研究が示すように、学生が「幼児教育祭」に向けての活動を通して、お互いの意見をぶつけ合いながら相手の思いに気付き、協働性を養っていく過程は、生易しいものではない。しかし、「幼児教育祭」終了後約１ヶ月で保育者として現場に立つことを考えると、自分自身の殻を破り、相手と本音で向き合う機会となり、学生の育ちのためには重要な過程であるに違いない。

以上のような思いをもとに、今後「保育内容総合」「幼児教育祭」における指導と研究を行っていきたいと考えている。しかし、今回は発表形式による相違点、また共通点を見出すことができたが、このことは、クラス固有の特徴なのか、発表形式の影響を受けているのか、分析を要する点であるため、継続的に研究することで理解していきたいと考える。そのため、次年度に向けて引き続き、「保育内容５領域が活動に含まれる実感度」、「保育内容を取り扱う際の留意点を意識･体験した程度」について調査し、発表形式毎に検討する。

そして、新たな視点として、「幼児教育祭」に向けた活動に入る前の、学生それぞれの保育内容５領域についての理解の程度に注目し、それが「保育内容５領域が活動に含まれる実感度」、「保育内容を取り扱う際の留意点を意識・体験の程度」に、どう影響するのか、またどのように変化していくのかについて分析を行いたい。加えて、学生が担当する役割などの属性について統計処理を用いて分析することで、実感度や意識・体験に影響があるかどうか検討したい。また、関連のある項目を抽出することなどにより、学生の「保育内容総合」「 幼児教育祭 」の中での成長について、影響を与え合う要因を把握したいと考える。

【引用文献】

１）鳥居恵治・長柄孝彦・妹尾美智子他.「幼児教育祭」を保育現場につなげるために（その１）－遊び支援を意識して－. 全国保育士養成協議会第 47 回研究大会研究発表論文集. P118 － 119. 2008

２）大岩みちの・妹尾美智子・本山益子. 舞台発表を通しての「気づき」（その２）－保育内容を意識することをめざして－. 岡崎女子短期大学研究紀要. 第 41 号. P17 － 22. 2008

３）大岩みちの・妹尾美智子・本山益子. 舞台発表を通しての「気づき」（その２）－保育内容を意識することをめざして－. 全国保育士養成協議会第 46 回研究大会研究発表論文集. 2007

【参考文献】

・妹尾美智子･鳥居恵治･長柄孝彦他.「幼児教育祭」を保育現場につなげるために（その２）－保育実践力の獲得をめざして－. 全国保育士養成協議会第 47 回研究大会研究発表論文集. P120 - 121. 2008

・文部省.『幼稚園教育要領』. 大蔵省印刷局. 1998.12

・厚生省児童家庭局.『保育所保育指針』. フレーベル館. 1999.10

・文部省.『幼稚園教育要領解説』. フレーベル館. 1999.6.

・森上史朗・大豆生田啓友・渡辺英則.『新・保育講座　保育内容総論』. ミネルヴァ書房. 2001.4

・高杉自子著. 子どもと保育総合研究所編.『子どもとともにある保育の原点』ミネルヴァ書房. 2006.6.

【付記】

なお、この研究は、全国保育士養成協議会第 47 回研究発表論文集及び口頭発表を加筆修正したものである。